





# 佐藤氏虐殺

日帝の軍事力を米軍の指揮下にし  
つから組み込み、その突撃隊として  
最前線に投入できるようにする  
ことが必要となってきたのである。  
ある。日帝の側から言えば、急膨  
張した在外権益を守るために、増  
々米軍に頼らざるを得なくなると  
共に、米帝の世界戦略にそつて軍  
拡・戦争遂行体制の確立が急がれ  
ぱはならなくなっているということ  
である。軍事と国際政治は米帝  
かせで、日帝自身は経済的な採取  
を遂行してきた。持てる帝國主  
義の他の戦争遂行体制と決定的に  
区別されるのは、ファシストが  
がつくさうとしている戦争体制が  
ファシズム体制かと言えども、  
ファシズム体制だとは言えない。  
ファシズム体制を帝國主義  
現在が国において日帝の帝國主義  
のである。

しかし、戦争遂行体制が一般に  
たとえいフアシズム体制とは言  
はない。ファシズム体制は、ブル  
ジョア民主主義制度の下で侵略戦  
争を行ってきた。持てる帝國主  
義の他の戦争遂行体制と決定的に  
区別されるのは、ファシストが  
がつくさうとしている戦争体制が  
ファシズム体制かと言えども、  
ファシズム体制だとは言えない。  
ファシズム体制を帝國主義  
現在が国において日帝の帝國主義  
のである。

## 2.3

12.22 佐藤さん虐殺弾劾、「右翼テロ」一掃!

午後3時

山谷現地追悼集会（玉姫公園）・デモ

主催

2・3人民葬実行委

△連絡先：山谷争議団TEL（03-72）7081

山谷と全国を結ぶ人民葬

午後6時

佐藤さん追悼人民葬（荒川区民会館）

主催

2・3人民葬実行委

△連絡先：山谷争議団TEL（03-72）7081

12.22 佐藤さん虐殺弾劾、「右翼テロ」一掃!

午後3時

山谷現地追悼集会（玉姫公園）・デモ

主催

2・3人民葬実行委

△連絡先：山谷争議団TEL（03-72）7081

山谷と全国を結ぶ人民葬

午後6時

佐藤さん追悼人民葬（荒川区民会館）

主催

2・3人民葬実行委

△連絡先：山谷争議団TEL（03-72）7081

12.22 佐藤さん虐殺弾劾、「右翼テロ」一掃!

午後3時

山谷現地追悼集会（玉姫公園）・デモ

主催

2・3人民葬実行委

△連絡先：山谷争議団TEL（03-72）7081

12.22 佐藤さん虐殺弾劾、「右翼テロ」一掃!

午後3時

今世紀の初め物理学上の大変事が達されたなかで、物理学者は核反応を起こさせるに成功し、次いで「核分裂」を引き出した。この時から原爆の道は数年を要したにすぎない。しかし、そこには第二次世界大戦という舞台装置が必要だった。

原爆製造計画を米政府に熱心に提案したのは、ナチスに追われた亡命物理学者らであった。かれらはナチズムの脅威に対しても、新型の恐るべき破壊力を持つた武器に対抗し、これを屈服させるべきであり、ドイツも同様原爆の開発に着手しているであろうから、製造においてこれまでに先んじなければならないと政府を驚かせつけた。四年米政府は、科学者、技術者、企業と大学の研究所を結集し、マソハッタソン計画として知られる原爆製造計画に着手した。同計画は陸軍省を中心となり、十万人以上の男女の農業労働者、群衆を動員し、一千億ドルを上回る資金が投入され、極秘裡に進められた。四五年七月実験は成功した。しかし、その二ヶ月前ナチスは降服し、原爆は一部学者の反対、また最初の意図とは違ひ広島をて長崎へ投下された。惨敗が明白であつたにもかかわらず、いまだ抗争せる日本にそれが向けられたにせよ、原爆投下は次いで生起するであろう連との対決を覗

二、歴史の点描

三

荒木周造

# 核・原子力と現代帝国主義

卷之三

三  
次

## 三 技術革新の第三の波 四 核と安保体制（以下次 五 自然、技術および生産と原 六 人道主義と日和見主義

のいたた  
紀の初め物理学上の大変革が達成  
なかで、物理学者は核反応を起  
ことに成功し、次いで「核分裂」  
出した。この時から原爆への道は  
要したにすぎない。しかし、そ  
一交戦界大戦といつ舞台装置が必  
製造計画を米政府に熱心に提案し  
ナチスに追われたヒューマン物理学者  
った。かれらはナチズムの脅威に  
は、新型の恐るべき破壊力を持つ  
て対抗し、これを屈服させるべき  
ドイツも同様原爆の開発に着手  
するであろうから、製造においてこ  
んじなければならないと政府を焚  
た。四〇年米政府は、科学者、技  
企業と大学の研究所を結集し、マ  
タン計画として知られる原爆製造  
着手した。同計画は陸軍省を中心  
、十万人以上の男女の熟練労働者  
員、一千億ドルを上回る資金が  
、極秘裡に進められた。四五年  
へ投下された。惨敗が明白であつ  
つかわらず、いまだ抗争せる日本に  
また最初の意図とは違ひ広島をし  
れ、極秘裡に進めた。四五年  
裝備の原爆を就航させ、戦略爆撃機、I  
CBMに続く、戦略核力の第三の柱と  
した。米ソ双方による戦略核力の強化  
は、かくしてひとびと核戦争が始まれば  
所へと来た。

四年に原爆の開発にこぎつけた五  
年イギリスがこれに続いた。五  
独占は数年をへずして破られた。止る處  
を知らぬ核軍拡の幕が切って落された。  
五年、アメリカは水素爆弾の実験に  
成功した。しかし、それによりソ連に対  
し優位な位置に決定的に立つというこ  
にはならなかった。翌年、ソ連は水素爆  
弾の成功を公表し、かつ実用化では先鞭  
をつけたのである。一方の先が他の方  
の強化はライバルを競えずにはおかな  
いという事態が、核兵器の分野で米ソ間  
でかくして演じられることになった。  
戦後、合衆国が築いたソ連包围網をか  
いくべつて反撃すべく、ソ連はいちばや  
くICBM(大陸間弾道弾)の開発に成  
功し、統じて、ステートニックを打上げ  
た。ソ連もまた米国を直接核攻撃する能  
力を獲得した。米国は核戦力全体で依然  
核と原子力問題の重要な社会的な側面を  
一百年間よりもある意味で密度の濃いもの  
だったといえよう。それを網羅すること  
を手にすれば、この四年間の社会、および  
世界の烙印がくっきりとおさされている。  
核兵器および原子力発電の可能性は、  
そこには、この四年間の社会、および  
いつか抽出してみることができる。  
科学がいち早く予見したものだった。そ  
れらは現実の姿を現す前、人間の頭  
腦の中に浮かび上がっていた。その出現  
には、科学の一層の深化とともに技術の  
媒介が不可欠であった。第一次世界大戦  
は、予見を現実のものとする技術の大動  
員と一大進歩をもたらした。  
第二次世界大戦においては、原爆に  
限らず技術の前進には目覚しいものがあ  
った。その王だったものには、航空機の  
発展、とりわけジェット機の出現、レー

（二）

ダの開発、自動制御装置、電子計算機の開発、ミサイル、合成繊維、合成ゴムは、戦後技術革新の出発点となったものである。これらの多様で先端的な技術は、見相互の関連を失っているかに見える。しかし、これら全体には自動制御技術が深く係っている。電子計算機は言うに及ばず、レーダー、原子炉の操作、航空機の運航、ミサイルの誘導、その他化学工業の生産過程にもそれは使われている。自動制御装置技術の発達の中で、これら一連の技術革新は可能となつた。すなわち、この時期の技術革新はオートメーション装置を生み出し、その発展と工業分野への広範な応用の基礎を造り出したのである。

一八世紀後半から一九世紀前半にかけイギリスを中心として、いわゆる産業革命として知られる一連の諸技術の革新がなされた。それには、当時の主要産業たる錠工業、織維業における紡績機の機械化と改良として発展し、その関連産業に波及した。機械の改良は強力な動力を要求し、それはフットによる蒸気機関の発明で満たされた。機械製糸業の発展は資本主義的な生産関係を発展させ確立し、不可欠の条件だった。

資本主義社会にあって生産技術の革新は、不斷の要請である。資本の目的は剩余価値である。資本の目的は剩余価値の生産、それより大きな剩余価値の実現であった。そのためには労働日数の延長、労働の強化、賃金の労働力の価値より下への切下げがある。しかしながら、この方法は、労働者の反抗を伴わずにほかは、また、それにによる剰余価値率の増大には定の限界がある。た。一個の資本が自己の剰余価値率を不斷に増やすためには、労働の生産性を高め他資本に較べ商品の個別の価値を低下させることが必要である。これは、生産技術の改良によってたらされた。とはいっても、個別資本による生産技術の改良は、資本主義社会における競争の下では、遅かれ早かれ同一産業部門に波及する。特に、個別資本による生産技術の改良は、資本主義社会における競争の下では、遅かれ早かれ同一産業部門に波及する。特別剰余価値の獲得はここで終わる。しかし、同時にそれは新たな競争の出発にすぎない。他方、一産業部門での新しい技術の採用は、他産業部門にも波及して、第一次産業革命の一矢を発する。一方で、一方で全体として全商品価値を低下させる。直接には生活諸手段および色彩が豈れられることなく、人間品の低下は、結局、労働力の価値を底に定めた。

したのは、一部の物理学者だった。かれら一科学者の研究と実験で、それを造りだした。巨大な軍産複合体が経済構造の中に出することは、當時到底不可能だった。原爆の製造技術の開発は、ワットやエシソンの働きかせたインスピレーションの何千倍を、また、その何万倍もの流行が必要とした。短期間に、二十億ドルもの資金を投入し、一千万人の人員を動員するような計画は、それがいかに巨大化したこと以外に存在しなかった。だから、原爆開発をはじめとした第二次大戦中に始まった技術革新は、色濃く軍事的色彩を帯びると共に、国家的色彩をも強く付着させていたのである。

原爆開発を含む技術革新の第三の波が持っていたこうした特色は、これら技術の基礎や原理を提起した科学研究の上にも刻印されたる未だなかつた。科学者どもが、その実験室とは、ますます国家に接近していく。その庇護、援助なしには成り立たなくなつた「逆に、国家は自己に有用であることを認められた研究と科学者には金を出し、自分を保護したが、それがいかに重要であるかを理解していない」という現状が、この役割と比重の飛躍的な上昇があつた。また、この資本の過剰によつて不可避になつた資本主義の腐朽化がある。これを強力をもつて突破せんとする国際連合は、いまひとつ決定的な因が不可欠であった。

しかし、そこには第一次および第二次世界大戦中に始まつた第三の技術革新の波も、根底的にはかかる「資本的衝動と不斷の傾向」の產物である。第三次技術革新には、軍事的衝動と不斷の傾向との関連性が見受けられた。シエット戦闘機は、ミサイルは言うに及ばず、爆弾開発は端を発する巨大科学を生み出した。それによって科学は巨大資本と國家の供給の断絶に促され、急速に発達する。これが現代科学は、原爆開発によって科学は巨大資本と國家の供給の断絶に促され、急速に発達する。第三次技術革新には、軍事的衝動と不斷の傾向との関連性が見受けられた。シエット戦闘機は、ミサイルは言うに及ばず、爆弾開発は端を発する巨大科学を生み出した。それによって科学は巨大資本と國家の供給の断絶に促され、急速に発

二 動るし渡子。家りてがり自る飽要義経れと義マ核し

第一、歴史の  
器にしてよ原子力発電にせよそれは  
活の不可欠の一部となつてゐる。  
え、その歴史と実績とはいまだ四  
満たない。地球の歴史約四〇億年  
人類史は「三〇万年足らずである  
文明生活はどうぞ、それは數千  
のものである。その内ほんの最  
年の間に、人類は自己自身を、そ  
上の生物を破壊しうる程の力を獲

点描

# 核・原子力と現代帝国主義

三  
次

はじめに

一 原状の「テッサン」（前号）

二 歴史の点描

三 技術革新の第三の波

四 核と安保体制 （以下次号）

五 自然、技術および生産と原子力

の最も大きなものにはかなわない。資本主義時代に限らず、戦争が技術革新および経済発展に与えた大きな影響力を否定するの促進、また、莫大な額にのぼる軍需ことは、もちろんできない。しかしながら、第一次世界大戦ほど新しい技術革新が戦争と極度に結びついた事例は、過去に見当らないだろう。

ところで、近代ブルジョア社会においては、軍事、戦争というのはほとんど國家の専権分野だった。ブルジョア国家は、人民を軍事活動に徴用し、かれらを近代的兵器で武装させた簡單として蓄えられ、一方で、国家が占める資本主義と呼ばれるこの軍事技術開発を主導とした技術開発

軍事技術開発を主導とした技術開発

国家プロジェクトとしての軍事技術開発の促進、また、莫大な額にのぼる軍需用とは、国家の回りに群がる金融独占本を潤おした。

国家の経済活動上占める役割と比

とは、すでに帝国主義時代において上

してきていたものである。第一次世界戦および大恐慌とは、量においても質においても資本主義経済における国家の割の新しい局面を出現させていた。す